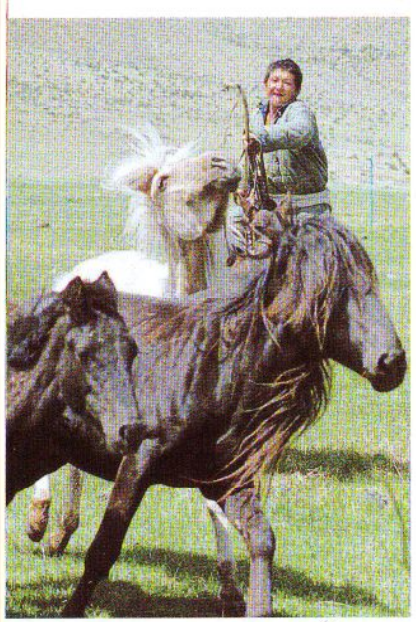
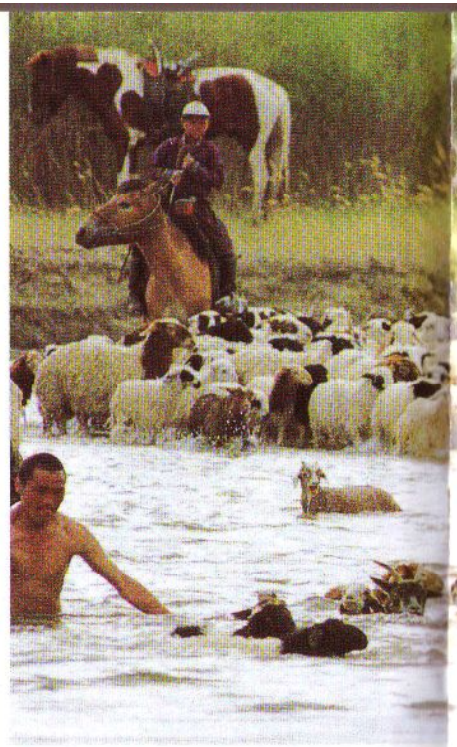
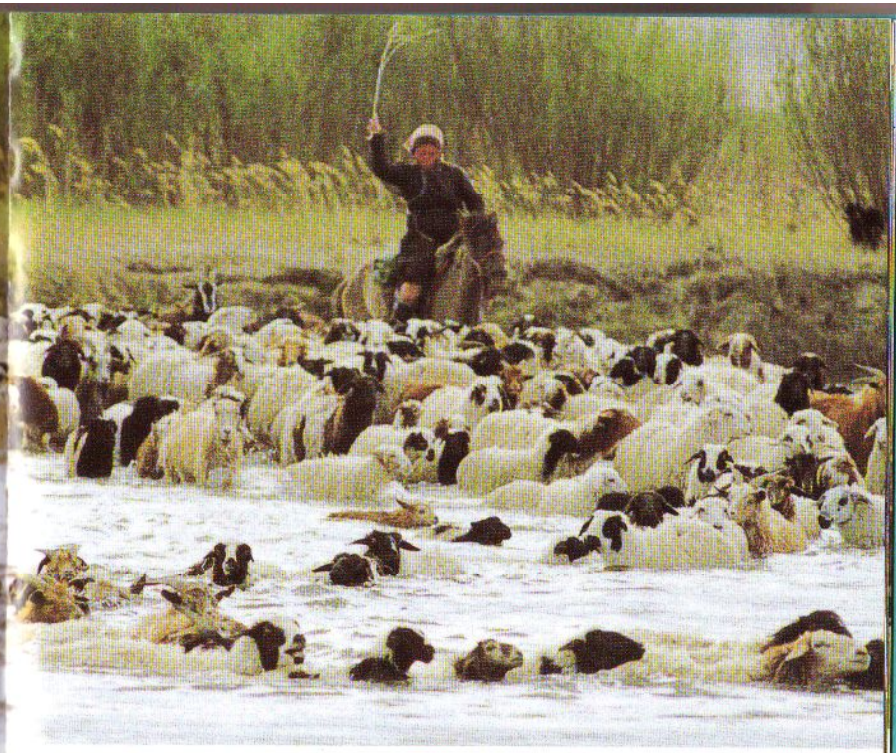
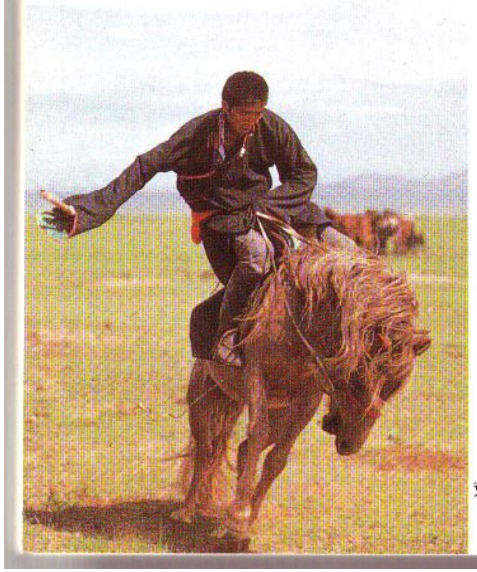


馬を捉える少年

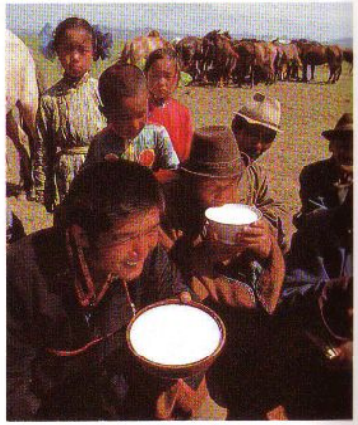




夏――むちをふるって羊の群れを川の流れに追い込む牧畜民

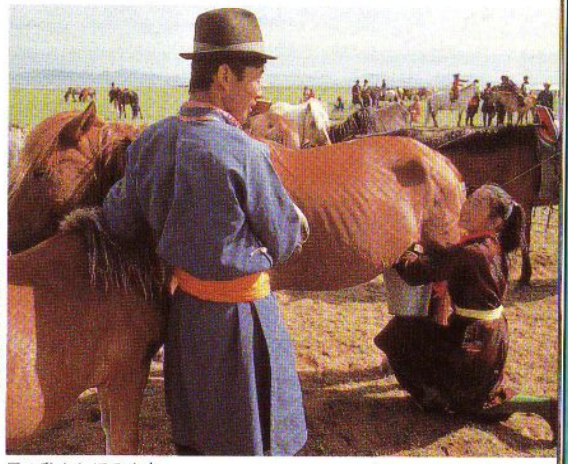


荒馬を乗りこなすのも大切な仕事



アイラグ（馬乳酒）は飲み物の主役

チーズのさまざま



馬の乳をしぼる少女

図D　モンゴルの四季～家畜と共に

（2）食生活

乳と肉の複合利用型、家畜の屠殺と肉、多様な乳製品、馬乳酒（乳糖不耐症）、**茶**（ビタミンC）、**穀物**（食生活の大きな変化）

（3）モンゴルにおける農業の意味と今後の課題

穀物は**茶**と並ぶ重要な植物性食品として、古くから利用されてきたが、**ステップの耕地化過程**は内外モンゴルでやや異なる。

即ち、**内モンゴル**には1700万人という多くの漢族が居住するが、これは清朝の末期に南部に大量の漢族貧農がなだれ込んだことに起因する。

彼らは、美しい生産性の高いステップから無秩序に耕地化を図り、現在にみる激しい侵食地帯（風食及び水食）を作ってしまった。その回復は、現在も**内モンゴル**の人々に対する大命題となっている。

そして、今また激しい開墾とそれに続く侵食が！！

一方、**モンゴル国**では、人口が少ない（現在約250万人強）ためごく最近まで穀物の生産量は微々たるものであった。しかし、第2次世界大戦後の本格的な耕地開墾の結果、穀物は完全に自給できるようになった。

このことは、豊かな鉱物埋蔵量とあわせ同国の地位向上を示すものとなった。

しかし、ペレストロイカ以降のモンゴル国における**経済混乱**の影響は深刻であり、現在も多くの人々が生活苦にあえいでいる。今後は、多大の問題を抱え呻吟する現状を打破するために、**土地の適正な使用による農業と牧畜の秩序ある展開**を図ることが重要な課題である。

モンゴルの遊牧が有する根源的な重要性を、次の2つの論考から検討しよう。

1. モンゴルの遊牧を再評価する重要性

土地所有の観念と環境問題（科学73(5)、2003）

巻頭言　松原正毅

2. モンゴルにおける遊牧から環境保全と開発の関係について考える

参照；モンゴル環境立国の行方（科学73(5)、2003）【総論】生まれ変わる遊牧論　一人と自然の新たな関係をもとめて　小長谷有紀

1．モンゴルの遊牧を再評価する重要性

・地球の表面を覆う土地は、誰のものか？
・地球上の土地を人類が所有する権利はあるのか？

土地所有の観念は、農耕という生活様式のなかから発生した → 農耕の原罪？

現在的な土地所有の観在的な土地所有の観念
土地所有の確立と一体化すべきとの信仰

2002年6月、モンゴル議会において土地の私有化法案が議決 → 市場経済化＝土地所有化

これは、遊牧という人類の生活様式を圧殺する観念 → なぜなら、**遊牧**は、共有化された空間でのみ成立しうる生活様式であり、**すぐれて全体的な環境維持のシステム**だから

現在動いている世界経済は、個人の欲望の肥大化を極限まで追求するシステムであり、環境問題の解決を考えるとき、**このシステムに代替しうる方策**をみいだす必要があるのでは

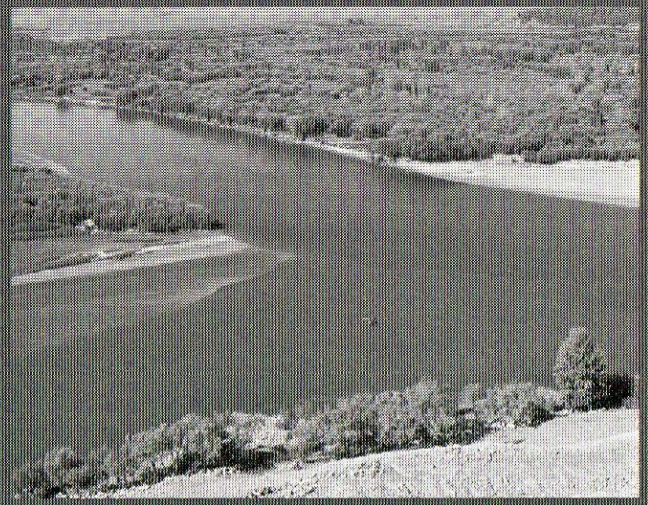
↓

【土地所有の観念を根源的なレベルで再考】

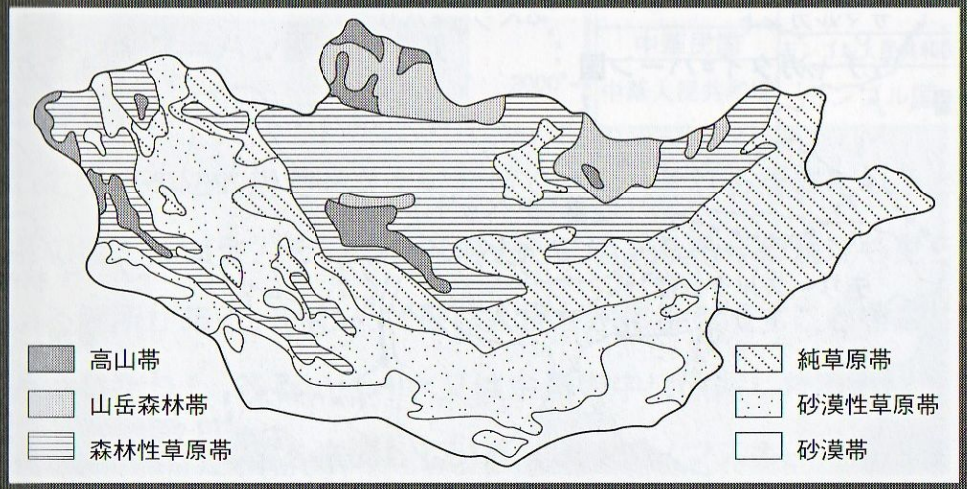
これこそ**遊牧の再評価**につながる道

モンゴルの自然～地勢と植生帯分布

モンゴル地勢図.



セレンゲ河（上）とオルホン河（下）の合流ポイント.（撮影：ナチンションホル）



モンゴル植生帯分布図. 三秋尚：牧畜と食生活. 日本モンゴル友好協会編『モンゴル入門』三省堂（1993）を改変.

エーデルワイス.（撮影：ナチンションホル）

2. モンゴルにおける遊牧から環境保全と開発の関係について考える

農耕（文化culture）と 都市（文明civilization）
→共に、大地に対する集積的な労働力の投下あるいは資本投下で共通

これに対して、遊牧は大地に対する集積的な投資を可能な限り小さくすることによって環境を維持
＝「分散型」ともいうべきもう一つの文明の維持
＝地球的遺産であるモンゴル草原の維持

次世代へ伝えるためには、20世紀を再考し、人と自然のあり方を再検討することが必要

●「遊牧に対する偏見の打破」が重要

先ずは、遊牧の本質を理解すること

遊牧とは、季節的移動を必要とする牧畜（５畜）

歴史的に、遊牧はユーラシア大陸に広がる乾燥帯の東端に位置する高原において、**主要な経済活動**であり続けた

植生への負荷による環境劣化を避けるため、**遊牧民は1カ所にとどまることを好としない**

季節的移動は、水場と草の分布が一致しない空間を高度に利用する合理的な手段

ゲルの移動＝生業上の手法であると同時に、いわば掃除にも等しく、美しく暮らすための「倫理」でもあった（農耕民との対比）

↓

しかし、遊牧のもつ「移動性」ゆえに、遊牧はさまざまな偏見にさらされてきた

第１；低生産性（土地の利用効率）、粗放的

第２；マルクス史観では未だ農耕未満

第３；国家による国民の掌握という観点から見ると、恒常的に移動する人びとは社会的規範から逸脱し不都合

限られた物を活かす遊牧民の生活＝ほとんど停滞した社会だと見なされてきた

●「文明史上の価値転換期」を迎えている

現在、地球規模での環境問題の議論において、持続可能性という概念が重視されてきた→ようやく「変わらないこと」そのものが価のものが価値を
→きわめて高度な技法による実践の結果

変わらないことが再評価、遊牧にまとわりついていた「遅滞性」もまた「先進性」と読み替えられうる時代を迎えた

遊牧を持続可能性の観点から再検討すること
→近代がこれまで疑ってこなかった進歩の概念や科学のあり方そのものを再検討することに等しい

●「環境保全型産業としての再生への道」をさぐることが今後の重要な課題

モンゴル草原が「人為の干渉」によってこそ維持されている事実→適度に放牧されたとき、種のの様性に満ちた草原となる

20世紀にもたらされた大きな社会変容は、自然環境に対してどれほどの影響を与えたのだろうか
→草原の開墾、森林の伐採がもたらした天罰か？
→乾燥地域での不確定性に柔軟に対処するため、植生への負荷を移動によって臨機応変に加減してきた技術を忘れたツケか？

惨憺たる現状を打破するために、移動を要とする牧畜のシステムを再び作り直さなければならない

環境を保全しながら産業化を果たす新たな道をさぐることがこれからの課題

モンゴルの草原と遊牧がもつ、地球規模での、現代的な意義→近代、進歩、科学、開発など20世紀が是としてきた概念全ての問い直しをせまること、

その成果が期待される

これらは、すべてモンゴル族の皆さんの双肩にかかる責務です。しかし、文化を忘れ、歴史を忘れ、言葉を忘れては、全くの夢物語となるでしょう。皆さんの、がんばりを心より望んでいます。

98 8 26